



紅
い
狐

Studio ***46

目次

-灰心-橘診療所シリーズ 1	2
☒Aメロ -蒼-	3
☒Bメロ -蒼-	7
☒サビ -紅-	12
☒Cメロ -紅-	17
終曲 -空-	22

生まれて来てはいけなかった。それが、少女の目に映る夢の終わりだった。

「殺しても死なない。ほら、これが魔竜ですわ」

長く幽閉される城の床で。血にまみれた^{あか}紅い右眼が、夜に^{ついで}潰える青い光を湛えた。

今まで幾度も、ヒトならぬ魔竜は殺されてきた。殺される都度に体が治り、相手の「力」を憶えることが繰り返された。

——もう、抑えられない……助けて、誰か。

額の紋様が青黒く浮かぶ。生まれた時は蒼かった髪が^{あか}紅に変わる。

それでも小さな星の歌が、果てしない災禍である少女を変えた。白い翼が夜空を映し、鈍く汚れて光を失っても。

「……ごめんね？　あたしはやっぱり、魔竜を始末したい」

自身の呪いを、やっと思い出した時に、地下牢の少女は長い眠りから醒めた。そして新たな、これからの夢を見るようになった。

——……あたしは何処かで、死ぬみたいだから。

「一緒に、地獄に行こう？」

バカね、と。魔竜がくすり、と、自身のこめかみを^{わら}撃ち抜いて嗤った。



-灰心-橘診療所シリーズ 1

世界の三大災厄と呼ばれる、「悪神」と「忘却」と三度目の魔竜が全て封じられた時代に。人間の国にある教会の一室で、風の語り部から「忘却」を追い詰めた魔竜の話聞いた彼は、どうしても思わずにいられなかった。

「なあ。それって魔竜が、自分を殺そうとしなきゃ解決だったんじゃないか？」

長い翠の髪語り部は、事情を聴きに来た「灰の神」に苦しい顔で笑った。何故なら「魔竜」は、魔竜を滅ぼさんとする者の記憶を消す「忘却」を、わざわざ己が手で片付けたという。その結果として自身の制御も失った魔竜は、災厄だと認められてしまった。

魔竜の源の宝、自然の化身の竜人が持つ逆鱗は己を守るための心だ。だから自ら死に向かおうとすれば、逆鱗はたとえ魔と化してでも己を守っただけ。

魔竜が魔竜となったのは、「悪神」と「忘却」の奸計もある。そして何より、同じ竜種にこぞって殺されそうになった結果、魔竜は「力」を強めていった。だから真に禍と化す前に、自ら滅びようとあがいていたのだから。

語り部は苦く、笑って付け足す。

「そうですね。おそらく、貴方と同じです、アッシュ殿。ヒトの脆い心で不滅の現身を得てしまうと、出口を探したくなるのかもしれない」

けれど、魔竜がこの世に在ったことで、その裏方の「悪神」と「忘却」が災厄であると認識された。「灰の神」のように弱小な元人間ではなく、古の災厄は魔竜を利用して、強大な竜という種を潰そうとした。自然の化身である竜種は、埒外の存在である魔竜を認めないことはわかっていたからだ。

「『神』なんて災厄だろ、基本。面倒な古参を片付けてくれたことは、俺としては非常にありがたいんだがな」

「それでわざわざ、ディレスまで来たんですか？」

さてな、と。ヒト型の人形を作るしか能のない「灰の神」も、現在特に何をするでもなかった。「忘却」があとどれくらいの間、眠っているかを確認に来たのが大きい。

ただ、「忘却」に抗った魔竜の話は、不思議なほどに彼の心に残った。それから魔竜が四度目に現れるまで、己の記憶を保っておこう、と思ってしまった程度には。

☒Aメロ -蒼-

欠片ほどの縁ゆかりしかないのに、悪魔の陣営にも顔を売っておいて良かった。彼、いつの間にか悪魔の君主の一端にされた「灰の神」は、自分に言い聞かせるように思った。水や塵芥の扱いに僅かに長けて、現存期間がやたらに長いだけの彼に、蠅の悪魔の適性があるとされたのはどう考えても過大評価なのだが。

おかげで別派閥の真性魔王一派が久しぶりに魔界から出た時、魔王が狙う一つである魔竜の情報を横から入手できた。魔王より一足先に、魔竜を追いつめることができた。

千年待った。「忘却」の封印が解けるのはおそらく千年強と言われ、再び「忘却」が動き始めた時には、彼の魔竜の知識も盗られかねない。その前に会うことができて良かった、と、とりあえず押し倒した紅い髪の少女を真上で見つめて無情に想った。

「——あ……」

現在いるのは、彼が人間界に出入りする時、使わせてもらう屋敷の一角。その富豪の友人として、魔竜の混じる一行が滞在することがわかったからだ。彼はその屋敷においては、ホームステイ中でカジュアルな留学生なだけだが、魔竜と思しき紅い髪の少女を見つけられたので、相手が客室で一人になった時に押しかけていった。

初対面の少女は、座っていたベッドで突然見知らぬ悪魔に組み伏せられて、紅い髪より更に赤い顔になると、あたふた彼を見上げて暴れ始めた。

「ア——ナタ、誰っ……!？」

おそらく少女は、彼の気配が悪魔としてはあまりに弱いために、執事や召使の一人とでも思ったのだろう。これだけ近づく間際まで警戒を見せなかった。

異世界の妖あやかしである少女は、人間界では「力」が弱っているのも大きい。少女にとっては危険の少ないはずの屋敷で、隙を見て両手の根元を抑えつけられ、そして何故か体が動かなくなるなど、全く想定外だったと見えた。

——……名乗れるほどの、名前もないわけなんだが。

少女に覆いかぶさる形の、情け容赦ない彼は彼で、正直面食らっていた。

彼は元々、有名な悪魔の適性がわずかにあるだけの、至って弱小な「神」に過ぎないヒトだ。だから魔竜と相対するなら、まず無力化を、と思って、有無を言わず両手首を掴み、彼の特殊な「力」を最大に送った。

弱小な彼が悪魔をしていられるのは、ひとえにこの奇襲が誰にも有効なことだ。本当にただ、相手をしばらく無力化するだけの「力」。使い勝手の良いところには、特性を知られても相手に近付きさえすれば、いつでも通じる「力」であること。

「な、んであた、し……動け……——」

仮にも魔竜と言われる化け物の少女は、こんな無力さが慣れないらしい。怯えというより戸惑いなのか、間近の彼を直視しながら真っ赤になってしまった。

——いや。そんな、つもりは。

少女のその反応が、彼にも意外で、困ってしまった。

魔性の^{あか}紅をきらめかせる竜。それはこんなに、心細そうな涙をうっすら浮かべ、おどおどと彼を見上げるイメージでは決してなかった。

強大で厄介な魔物を一つ、軽く拘束しただけのつもりが、これでは彼が無垢な少女を襲った絵面。とても始末の悪いことには、少女は年端もいかない姿で、よくて十五歳といたところ。更には並みいる悪魔の美女をもしのぐ美少女で、淡く潤んだ水葵^{みずあおい}の紫の目に、マズイ、と彼は理性を落としかけた。

これはやばい。魔竜がこんなに可愛いなんて聴いてない、と彼は、遠い日の語り部を脳内で責めた。

「……——」

動揺する彼が黙り込んでしまった下、少女はひたすら、ポカンとした赤面で彼を見ている。動けないので抵抗できず、状況もとんとわからないため、どうしていいのか、といったところだ。

それも意外だ。在りし日には竜種を滅ぼすほどに暴れた魔竜というなら、こんな不躰者には相応の呪いを吐けばいいのに。

外では木枯らしが強くなったらしい。分厚いカーテンをかける、黒い窓枠がカタカタと揺れた。灯りをつけずに眠っていた少女の薄暗い客室は、窓から差し込む日暮れの重い光しかない。

立冬が過ぎ、聖夜の近い年の終わり。黄昏時でも見やすい紅い髪が客用布団の上に広がり、両目の奥の青い光が彼に向けられている。寒いのに袖のない上着と短い襷^{ひだ}のスカートは小さな体を更に細く見せて、同じ年頃の間人より弱々しい生き物に見えた。少女がずっと、今にも泣き出しそうな紅い瞳で、彼を見つめていなかったのなら。

こうした初対面時の暴挙について、二十年以上後に、まさかの同屋敷での再会があった。すっかり紅い魔物から蒼い天使になった相手は、不服気に彼に言ったものだった。「いや、まさか、あの時のヘンタイが貴男とは思わなかった。いきなりヒトを戦闘不能状態にたくせ、一言も喋らず去って行くとか、どんな状況!? って、三日くらいこっそり考えたからね?」

「.....」

黒づくめに白衣の彼は、何一つ否定できずに俯くしかない。彼もまさか、お抱え医師になった富豪の下で、元魔竜に会うことになるとは思ってもみない運命の悪戯だった。

事態はおかしなことだらけだった。しかしとりあえず彼は、疑念を横に置いた。今は彼の雇い主の娘のことで、この蒼い天使と交渉をしなければいけない。

「で、ナナちゃんの件は、お前さんがこれから手を打ってくれるのか?」

「仕方ないでしょ、^{くどう}玖堂さんには色々恩があるから。でもあたしが表立って動くわけにいかないし、全部貴男——橘カイの横槍ってことにさせてもらうけど、よろしい?」

ただの人間である雇い主は、末の娘が不治の病にかかったことで彼をお抱えにした。彼は人間の病には普通の医師で、せめて苦痛少なく看取ることしかできない、という話だったはずだが、ある時からおかしな状態に屋敷が変貌していた。

「.....この屋敷をゲヘナに変えたのは、俺じゃないが?」

「知らないわよ、あたしに言われたって。あたしは玖堂さんの守護天使をしてただけなのに、どうしてわざわざ、娘さんの病気にまで関わることになったのかしら.....」

橘診療所。ただのお抱え医師なはずの彼の居室が、いつの間にか「屋敷の内に建てられた診療所」に変わっていた。

もうとっくの昔に廃業していたはずの、「灰の神」本来の特別な技能、「灰人形」を作る業のための設備まで地下に整っている。そうでなければ雇い主の娘を、人形にしても生かすことはできなかった。それもただ灰人形にするだけでは娘の心^{ナナ}を維持できるかが怪しかったので、一度娘の靈魂を見習い天使として自我の補強をした上での、彼と蒼い天使の共同謀略となった。

「玖堂家は確かに、人間界における時の闇の一端だったけど、あたしが知ってる頃には異世界に繋がる古井戸があっただけよ。それがどうしてこんな、アナザーワールドワイドな診療所になってるの?」

「俺に言うな。雇った覚えのない外来医までいるし、誰も彼も当たり前診療所があった顔をしているし、俺は嫌でも、院長をやらなきゃいけないらしい」

そう言いながら、彼には本当は、頭の痛くなるもう一つの記憶が怒涛のように押し寄せていた。目前の蒼い天使はわかっていない、彼とその相手を引き合わせた縁。

この蒼い天使が顕れた時から、彼は「橘診療所」に引きずり込まれた。蒼い天使と同じ姿かたちで、髪と目色の違う紅い妖^{あやかし}。地獄の底で生まれた彼女が誘う、^{いざな}「有り得なかった世界」の夢へ。



☒ Bメロ -蒼-

魔竜に会おう。不滅の「灰の神」である自分の記憶を、初期化を千年やめてまで企んだのは、恨みつらみだと彼は思っていた。

「橘診療所」の見慣れぬ天井。ソファに寝そべり、煙草の煙をくゆらせ、院長の彼、橘灰は思う存分微睡む。

魔竜が「忘却」をボロボロにして封印したせいで、「忘却」は大半の「力」の制御ができなくなった。そのため「忘却」が盗っていた彼の古い情報が大量に戻った。

最早他人事のような記憶だったが、不滅という存在はなかなか重い。彼が最初は人間に生まれたこともあり、「神」を降ろして永遠に歳をとらない体になった時に、初めて自らを殺してみようとした。その結果は自身の記憶をほとんど失うだけで、廃人の状態になって傷がゆっくりと癒えた。自分が誰かわからないまもうろろしていると、やがて常識だけが復活してきた。

彼の眼は、「神」になった時から「神眼」というものであるらしく、何かを眼に映していればそこにある「意味」、世界の在り方を勝手に認識していく。見ているだけでヒトに戻り、己の業も再び扱っていく。

だから彼は、自死という初期化で何度記憶を失くしていても、いずれ同じような彼として生活する。「意味」を捉える眼の情報時代ごとによって変わっていくが、受け取る彼は結局彼でしかない。

忘れた記憶は、世にいる限りは沢山できた。幾度も自分を殺して初期化し、永い時を往く旅に耐えた。「忘却」が何故それを保存していたかはわからないが、実は腐れ縁だったからかもしれない。「忘却」達の存在すら忘れさせられていたが、彼の初めの名前は「灰夜」だった。「忘却」は「白夜」、「悪神」は「悪夜」で、古の女神に近い「神」に送られるのが「夜」の名なのだ。

とりあえず彼に、そんな諸々の記憶を突然取り戻させた魔竜を、彼は逆恨みした。

——それって魔竜が、自分を殺そうとしなきゃ解決だったんじゃないか？

酷いとぼっちりを喰ったものの、「忘却」が派手に征伐されて、それで魔竜が報われたのなら良かった。なのに事もあろうに、魔竜は魔竜自身を殺すために、「忘却」の過保護をはねのけていた。彼にはそういう事の次第に聴こえた。

たとえ利用するためであったとしても、「忘却」が消したのは魔竜を滅ぼさんとする者達の記憶だ。わざわざその仄暗い帳を、引きはがす必要はあったのだろうか。どうして「魔竜」を負った少女はそこまで、自らを滅ぼすべきものと断じて生きていたのだろうか。

「魔」とは古来より、「神」にしか救い得ないと言われている。生き物が本来辿る必滅の運河を離れ、我執だけがどんな形でもあり続ける歪んだ魂。さりとして闇に在る「神」のように、不滅の「意味」は持ち得ないもの。

それが何故、「神」にしか救えないかはわかっていない。どう救うことが救いであるのかも曖昧で、「魔」でなくなるためには「神」に塗り換えられるのが早い程度だ。

「神」は不滅で、たとえ誰かに命を奪われた時も、相手の命に遷って続く。「力」が勝れば相手が何者でも「神」に書き換えられる。それをヒトは崇りや神隠しと呼ぶ。

彼のように、彼だから降りてきた「神」も存在している。世界のヒトは全て「神」の器に過ぎず、気まぐれに闇から出る「神」はそうして、己の「意味」を体現できるヒトに降りる。たとえば彼が、「水を穢す」才能しかない異端の弱者であっただけでも。

「魔」でなく、「神」にする。そんな下らない、暇つぶしなだけのつもりだった。

魔竜は多分、そんなことを望んでいないだろう。だから彼の記憶を戻したことの仕返しに、嫌がらせをしてやりたかった。

彼も魔竜も、要するに死ねない生き物なのだ。それが「神」でも「魔」でも、どちらであっても別に大差はないことだろう。玖堂家の客室で間近で魔竜を見るまでは、彼はそう思っていた。

——あなた、誰……？

細い柳の眉をよせて、耳まで赤らめていた魔竜の少女。押さえつけられた手の、指先が飛び飛びに震えていた。

「神」にするなら、彼をここで魔竜に殺させるか、彼が魔竜を殺せばいい。弱小な彼だが、彼が操る「力」の灰は、大気でも物でも体であっても、対象の内にとやすく侵入できる。そこに微かでも水気が存在すれば混ざり、穢れた水を含むものの動きを封じられるのが彼だ。

「水」は、世界が創造される前から漂っていたとされる、天上の^{しゅ}主がもたらす原初の^{めぐみ}恵。彼自身はとても弱い生き物でありながら、彼の担った「意味」はあまりに普遍で、ほぼ万物に通じる「力」であるために、悪魔の王の一端にもされてしまうわけだった。

だから彼は、弱いが魔竜を殺せる稀少な一人だ。普通の者が殺せば魔竜は復活するだけだが、「神」の彼が殺せば魔竜は彼に命を奪われ、彼の命に潜む「力」となる。

魔竜など取り込んでも制御をできる気がしないので、そこから彼がどうなるかはわからなかった。それでも、そうしてやろうと思っていたのに。

動きを封じられた少女が、彼を殺せないのは当たり前だ。灰の効果はそう長くは続かず、早く殺さなければ彼は返り討ちにあう。

それなのに少女の瞳の内を、食い入るように見つめてしまった。思えばあれが、地獄の火の池の入り口だった。

あの瞬間に、彼が黙って立ち去るか、それとも――

「……前世の記憶が戻る系主役って、こういう気分なのか、ひょっとしたら」

道はその時、おそらく分かれていた。

彼はそこで、蒼い天使が言うように無言で去ったはずなのに、「橘診療所」にいる^{カイ}彼には違う夢の続きが見える。

違う夢と言っても、起こることの大半は似ている。

蒼い天使と知り合った後、やっと見つけた！ と、彼の居所に海の竜が乗り込んできた。魔竜を待っていた旅の途中で、彼が気まぐれに懲らしめた高位の悪魔だ。「この乾燥した躯体であれば、貴方にも封じられないでしょう、蠅の悪魔！」

「……アホか。内外に空気があればそこには水気があるし、水素を全く含まない稼働物はそうそう存在しない」

彼が魔竜に会った、二百年以上前――玖堂家では二十数年前の時の魔王は、もう隠居している。最新魔王もやられた現在、残存勢力のツテで、悪魔であるその海竜は丈夫な依り代の人形を得ていた。

初めて会った頃には自我を持ったばかりの若い海竜が、工夫すれば召喚者なしに現界できる異端のために人間達に偉そうな顔をしていた。ちょっとばかり動けなくして驚かすと、恥をかかされた！ とずっと彼を恨んでいる。ここ百年は落ち着いていたが、どうやら今は暇らしい。

端正な顔と蒼い漢服で、「力」まで使える出来のいい人形だったが、世の物質を構成する原子自体、水素という原初の粒子に色々足したものだとは彼は学んだ。もっと細かい素粒子の高次生物でもない限り、彼の「力」を防げはしない。

いつも通り動けなくしてやると、何故！ と怒鳴りながら、玖堂家保健室の寝台にへばっていた。この光景はどんな彼の居場所であっても起こるものだ。

動けなくはできても、生き物でないものを殺し切れる「力」は彼にはない。生き物なら何とか殺せるように医学は学んでいるが、悪魔は概念と「力」なので、ヒトや物に宿らないよう、散らしておくくらいしかできない。

魔竜の少女は殺せただろう。だからあの時、彼はついうっかりと、勿体ない、とってしまった。

その少女はおそらく彼だけが、本当の意味で殺してやれる。^{のぞ}希みを叶えてやることのできる。それがわかってしまったから。

「魔」である限り、周囲から糧を取り込めば魔竜の体は復元してしまう。竜の糧とは自然なので、何処にいてもいずれは回復できてしまう。

特にその少女の回復が早いのは双子の姉の「力」が大きいためで、姉に生かされ続ける竜の巫女だった。玖堂家に滞在した少女と双子の姉の姿を見たので、彼には魔竜の抱えるひずみの根本がわかっていた。

ふう、と居室で机に足を預けて休んでいたら、隣の保健室で物音がした。

まだ動ける時間ではないはず、と思いながら、一応確認のためにドアを開けると、はたしてそこには彼の夢通りの光景が広がっていた。

「——ありゃ。本当に適合、できてしまった……このコやっぱり、父さん達の力を継いだ竜っばいなあ」

寝台の上、今まで白青の髪と薄青い目だった人形が、ある妖狐の宝の首飾りをかけて、様相のみならず声色まで変えて座り込んでいた。

彼は知っていた。この診療所にはこうしていつか、青白い狐火玉を媒介に天使が降りることを。

「あ、こんにちは、キッカイ先生。あれから菜奈ちゃん、お元気してる？」

にこり、と蒼い髪と水葵の目で、本来人形を動かす海竜と取引した者が笑った。海竜も不本意ではあっただろうが、魔力の提供者がいる方が人形の稼働が安定するのだ。

その色合いと人懐っこい声は、紛れもなくいつかの蒼い天使。

どんなところと場合においても、次代の竜の巫女を助けるために、必ず彼の前に現れるかつての魔竜だった。

「.....わかりきったこと、きくな。.....`なぎ、」

「？」と人形が、首を傾げた。あどけない表情は無防備そのもので、狐火玉の後ろの背には炎獄の翼が揺らめくことにも気付いていない。

「この海竜、なぎちゃんって言うの？ 可愛い。貴男、『神』だけあって、名付けは基本バッチリよね」

無邪気な天使は、いつもこんなに幼くはない。むしろ蒼い天使であるのは、魔竜であったことの代償のはずだ。それは償いというものではなく、滅びることができない魂のため、魔竜でなく天使として働くように鎖につながれた話。

紅い妖の青白い火が、近付いてきていた。彼がどれだけ逃げようとしても、他ならぬ彼こそがその妖狐を炎獄から連れ出す。

否定したかったのだが、無理なようだった。憑依の時に着崩れた漢服で、大きな袖でべたん、と座り込む人形が愛らし過ぎた。

そんな感情が浮かぶ相手は、どれだけ探しても他には見つからなかった。

「.....ところで、お前さん。俺の嫁になる気は、ないか」

☒サビ -紅-

長年待った魔竜を人間界で見つけ、立冬が過ぎた後の年の終わり。長い黄昏の陽に溶けそうな紅い髪が、客用布団の上に広がっている。魔竜たる少女はずっと、泣き出しそうな紅い目の奥、青白い瞳で「灰の神」を見つめていた。

木枯らしが強くなっていった。分厚い紅のカーテンの窓がカタカタと揺れた。灯りをつけずにいた少女のベッドを、窓から差し込む夕焼けの赤が染め上げている。

彼は正直、驚愕していた。

——いや。そんな、つもりは。

あなた、誰……？ と弱くきかれた。その場で思わず、口を開いていた。

「……名乗れるほどの、名前もないわけなんだが」

言葉をかわず気などなかった。魔竜を殺すか、それとも殺されてやるか、悩むのはそれだけで良かったはずなのに。

「あんたこそ、誰だ。俺は魔竜を探してきたのに……あんたはただの、可愛い化け狐じゃないか」

きょとん、と少女が、大きな紅い目を丸くした。次の瞬間、えええ？ と体を激しくのけぞらせるまで。

「何それ、離して、意味、わかんない……」

少女はおそらく、初心というより、感覚が鋭い方なのだろう。思わず声を出してしまった彼の、必死に抑える熱を感じ取っている。少女に向けられた強い想いは、彼が一番驚く程に体の奥から沸騰していた。

紅い髪のはずの少女に、何故か蒼い髪が重なってみえた。潤んだ縦の紅い瞳の内で、黒髪に黒目の彼が顔を歪める。

「神」となってからの彼に、普通の人間のような情欲はほとんど無くなっていた。命のやり取りが「力」の受け渡しになる「神」一般には、「力」を継ぐ子孫を作る行為は、己の「意味」を失うことだ。子孫の命に宿るのが末路になるが、それは子孫が「神」になることであり、彼はそれだけはさせたくなかった。

滅びることができない身など、自分一代で十分なのだ。魔竜のことも、彼なら滅ぼしてやれるかもしれない、そう思ったから追い求めてきてしまった。

滅びたがっている魔竜の、抱え続ける苦しみがわかった。それだけのことだったのだと、こんなところでやっとながつく自分に啞然としてしまう。

彼がここで関わらなければ、腕の下で震える魔竜は、やがて蒼い髪の天使となっていく。どうしてなのかそんな記憶が、何処からかもわからずに彼の理性を奪った。

その行く先は、つまらない、と。これから彼を、永遠に振り回す紅い誰かを、みすみす逃す手はあるのだろうか、と。

まさに悪魔のささやきだった。地獄の谷底、火の池のさざなみを司る暗黒の天使は悪魔と言ってよく、こうして時折地上に運命の悪戯をする。

この屋敷、玖堂家には異世界につながりやすい闇がある。やがて「橘診療所」という炎獄の入り口が建てられ、数多の異世界につながる中継点となる。そんな幻想が燃え上がるのは、魔の竜だった蒼い天使を、炎獄の支配者が欲しがったからだと後に彼は知る。

橘診療所のスタッフ面々は、自覚がないがほとんどが炎獄の天使の影を持つ。免れているのは蒼い天使の守護する雇い主と、その家族くらいだろう。

彼の前に現れた四度目の魔竜は、素体は妖狐として世に顕れていた。

それでも魔竜の業は消えない。「魔」とはそうして、一度囚われたら救われない魂を抱え続けるものだ。

その時点では妖狐として行動していた少女を、古い魔竜と一目で看破した彼を、当然ながら少女は警戒を始めた。魔竜他を狙う魔王一派に既に重く関わっており、一派の情報をやる、と提案する彼に、ある意味魔王本人を見るより怪訝な紅い視線を向けた。

「アナタ、いったい何が目的なの？」

魔竜以上に、その姉である竜人を魔王が狙っているのです、少女はやむにやまれぬ、と彼から何度も情報を引き出しに来た。その都度彼は、素直な心を伝えるのだが、赤くなるばかりの少女は受け取ろうとしない。

「だからあんたに、生きてほしいだけだ。どうせお互い、死にたい時に消えられる身じゃないからな」

彼、「灰の神」の特性も教え、彼ならいつでも少女を殺せる、止められると言った。だから少女は最早今後、己の「魔竜」に怯える必要はないのだと。

少女はずっと戸惑いながら、自身の業を話せる稀な相手に、遠からず心を開くようになった。

「どうしてそんなに、あたしのこと、知ってるの……？」

少女が魔王を利用する勢力の元へ、姉と離れて乗り込む直前のことだった。少女に協力して砦を提供した、魔王の配下の館へ彼は訪れた。

魔竜を知ったきっかけである、「忘却」のことを話し、ついでに腐れ縁だと告げた。彼の来訪に少女は初め、酷く驚いていたが、自身の過去を知られる理由を納得すると同時に、何故かとても不満な顔で、謎の不機嫌になってしまった。

「あの女と、長い付き合いなんだ……へえ……」

「神」同士だもんね、と、長椅子の上で膝を抱えてしまう。広い寝台に座って横目話していた彼は、少女の目の奥、青白い火の意味がわからなかった。

彼は、自分の命を狙う者は大軍規模で足止めできるが、逃げるだけで鎮圧ができない。灰を紛れ込ませた相手は命を奪うこともできなくはないが、悪魔である前に「神」な故に、殺生をすると抱える命が増える。ヒトも本当はそうして命のやり取りをしているものだが、「神」ほど直接互いの命と向き合う生態ではない。

悪魔は逆に、殺した相手の命を抱えず、魂だけを奪う魔の性を持っている。だから悪魔に殺された者は、黄泉路に迷って悪魔となることが多い。彼もそういう風に敵を殺すのが不可能ではないが、悪魔か「神」か、違いは一つ、殺す時の状態に左右される。自意識がおおむね「神」である彼は、悪魔として相手を殺すことが難しいのだ。

そうしたわけで、彼は弱小を自称し、戦闘には根本的に向いていない。足止めができるのは短い時間で、相手を殺すためか、彼が逃げるためにしか使えない。

それなので少女の、魔王擁立勢力との対戦には彼は同行しなかった。そもそも秘密裏に助力することに作戦上の意味があるので、ついていく必要を感じたこともなかった。

けれどそれを、初めて後悔することになった。魔王の配下の館から出た魔竜の少女は、謎の不機嫌の理由を説明することなく、魔王の変貌に不意をとられて魔竜たる逆鱗を奪われてしまう。

彼の配下にあたるものの、どちらかといえば彼に温情をかける悪魔の令嬢が、逆鱗を抉り出される大怪我を負った少女をぎりぎり助け出していた。

「死竜が助けようとしたから、仕方なく、よ。あのバカ……私とこの子を逃がすために、自分の守りを捨てちゃったのよ」

「……すまない。まさか死竜が、こちらをとるとは……」

令嬢の連れ合いになるはずだった魔王の配下、死竜の乗り手がそこで魔王に取り込まれた。その男は魔王を利用する勢力に牙を剥いて、少女を助けていた。

「死竜が認めたのなら、この子にはアスタロトの力が流れてる。妖狐な時点で、まさかと思っていたけど……あのバカの娘よ、紛れもなくね」

^{アスタロト}悪魔と狐仙の混血がその男だった。彼も少しは疑ったのだが、何分魔竜は、あやふやな生まれだ。男の若気の至りも知らず、魔竜の双子に狐の縁もほとんど見えなかったので、少女が妖狐である現実を軽視していた。

魔王の類でもなければ、竜の魂たる逆鱗を他者が完全に分離することはできない。

本当はここで、魔王は魔竜を自らの「力」とするはずだった。そのことを彼は、目覚めた少女からきくことになる。

どうして、生きているんだろう、と。

額に派手な穴があいた少女は、魔王に魔竜たる魂を奪われ、身体を復元できずに終わるはずだった。令嬢の城の寝台でそう呟いていた。

「あたしの代わりに……また、ヒトが、犠牲になっちゃった……」

額にあった逆鱗を失い、回復の要の右眼も潰されかけた少女を、裏切った死竜の乗り手がかばった。包帯をかける傷で済んだ右眼が、四度目の魔竜たる逆鱗のない少女を治したのは、魔竜でなく少女自身が生きようとした表れだった。

「あのヒト、ほんとは、戻れるはずだったの……でも、自分が消えても、生きてくれて……あたしは今、どこにいるの……？ アナタ、は……どうして……」

横たわる少女を看ていた彼は、そこで初めて、少女が未来を夢で視る者だと知る。

正確には、少女が視る夢の本質は「過去」だった。少女は遠い日、未来を夢で知る魔竜を己に降ろしたのだ。少女より以前の、最初の魔竜が見た夢を追い、少女は自分達の未来を知った。その夢で知った自身——二度目と三度目の魔竜を、禍だわざわいと断じて滅ぼそうとした。

彼は後悔していた。少女に土壇場で生きたいと思わせたのは、彼でなく少女の父であったことと。

「あんたは、ずっと……知っていたのか……？」

少女はいつか、魔王の糧となる未来を受け入れていた。その先に実体なき蒼い天使となり、橘診療所の彼と出会うはずであったことも。

「.....ううん.....さすがに、ただの夢って、思ってたの.....嫁になれなんて、あたしに言う奴、いくらなんでも、頭がおかしい.....」

ずっと少女に付き添う彼に、何の遠慮もないことを言う。彼も否定したく思っていた、未来の炎獄にある彼の感情。そのせいで少女に関わってしまった。

彼はいずれ、この少女に嫁になれ、と言うのだ。それを知ったのがあの黄昏の玖堂家で、ここにいる^{アッシュ}彼と蒼い天使が関わる^{カイ}彼が、「橘診療所」の淵で交じた瞬間だった。

二十年以上の時差があるのに、彼と彼は互いの感情を知った。それはおそらく、感情自体はとっくに存在していて、目を背けていただけだからだろう。

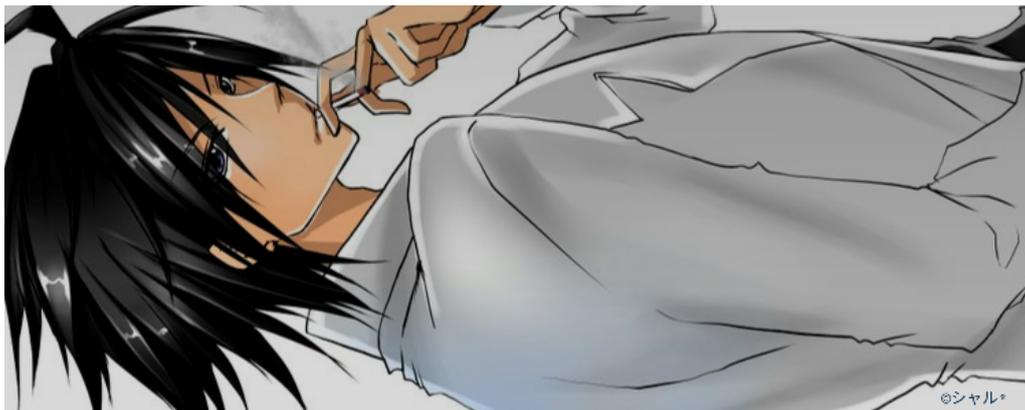
「.....じゃあ、言う。あんたの望みを、これから俺が、叶える手伝いをする。だから.....」

頭がおかしい。それはまさに、少女の言が正しい。

だから千年、時を待った。自ら滅びはできない彼と、「神」以外で永く傍らに在れる相手を。

「俺だけのあんたに、なってくれるか」

こたえを聞く前に、彼はあの日のように、少女の手首を掴んだのだった。



☒Cメロ -紅-

「力」——心の制御を担う逆鱗を分離されて、魔竜の少女はまともに戦えなくなっていた。双子の姉の再三の言い付けもあり、支援者の令嬢の城で大人しく守られていた。「大丈夫かな……向こうも記憶、戻っちゃったはずだし……」

双子の姉に、昔の力と共に記憶を宿す宝を、少女は返した。使わずに済むなら封じたままにいたかった、と、療養する寝台で膝を抱えながら言った。

「仮にも魔王相手に、力の出し惜しみは無理だろ。とられたのは逆鱗だけで、魔竜の本体が魔王に渡らなかったのも僥倖だからな」

ほら、と貴重な林檎を切って出すと、無表情のまま少女の頬が赤くなった。彼の前ではずっと素直でない少女の、嬉しさの表現だと段々わかってきた。

この妖狐はとにかく、甘い物が好きだ。徐々に食べ物で釣っていこう、と決めた彼に少女がほだされたのは、魔王と姉の戦いが決着した少し後のことだった。

「おねえちゃんが、とられた……やっど、ふつうに、いっしょにらせるとおもったのに……」

う、う、と幼い子供に戻ったかのように、令嬢の城で泣き続ける妖狐。変貌した魔王を正気に戻した姉が、そのまま魔王と人間界——玖堂家で働き、二人で暮らすと決めてしまったのだ。いつまでも長椅子の座面で膝を抱いて拗ねている。

「やっぱりアイツ、ころしておけばよかった……まけたあたしがわるい……ずるい、くやしい……」

やれやれ、と背面から頭を撫でると、回した腕にしがみついて、そのまま長々ぐずっていた。

「あんたも玖堂家に、一緒に住んだらいいだろ？」

「……ダメだよ。竜宮、また魔族に占拠されないように、あたしが封印しておかないと」

お。と彼は笑う。今度は突然、大人びたことを言う少女。この度の戦いの地の件は、その判断が尤もだと彼も思った。

「じゃあ、ついてってやる。残存勢力の掃除くらい、手伝えそうだ」

「……—」

そこでやっと、少女が振り返った。紅い目の涙は止まっていて、じーっと、何かを抑えるように不服気に、彼をひたすら見つめていた。

「？」

複雑な視線の意味を、令嬢の城を出て一日目で、彼は驚きと共に知ることになる。

双子の姉から「力」を預かり、魔王から逆鱗も返してもらい、健全に自身の意志で魔竜となった少女は、姉が魔王から奪回した竜宮の城に彼と二人で行った。

少女にとっては長く幽閉された地で、多少は勝手を知る城だという。着いてすぐに結界を張り、何人も訪れられないようにしたところで――

なんだ、これは。ツンデレのデレか。^{アッシュ}彼の知らないはずの概念が、おそらく橘診療所から流れてきた。

現在制圧済の領域に結界を広げ、疲れた、と唸る少女を、少女の希望で質素な部屋に休ませにいった時だ。

これから毎日、敵の動きを彼が止めては少女が排除し、いずれ竜宮全体を結界で覆う日々の一日目のこと。黒づくめの彼が寝台を整えてやっている時に、ていっと後ろから少女が彼を押し入れ、そのまま一緒に、未完成の寝床に入って甘え始めた。彼は呆氣にとられてしまった。

「……??」

背中側から、何も言わずにくっついてきて、彼に振り向かせないので表情がわからない。ぎゅっと掴んだり抱きしめたり、すりすり頬をよせたり、まるで動物のような触れ方をしてくる。

少女と違って寝間着にも替えていなかった彼は、少女が満足して寝つくまでは、自身の鼓動を抑えるためにもそっぽを向いて好きなようにさせた。

少しでも動く、眠っていても離すまい、と掴んでくる少女を置いて、狭い寝台を抜け出すのは無理そうだった。諦めて彼は、眠れないまま夜を明かす。

少女は彼に、これまで何の返事もしてこなかった。元々人付き合いが少ない「魔竜」なので、話し相手であるだけで特別なこと、気を許した者の隣でないと寝つきはしないことも、看護をしてきた身には一応わかっている。

だからおそらく、二人で竜宮に行くという時点で、少女の中ではとっくに彼が伴侶であるらしい。我侭だな、と、平和な寝息に一人ごちる。

後からうっすら聴いたことには、本当はずっと彼に触れたかったが、彼女のために連れ合いを失った令嬢の城では、とても近付けなかったという。

真っ赤になるのを見せたがらず、向き合っても眠っても彼の胸に顔を埋めてしまう。自身には進んで触れさせないわりに、彼には何かとくつつこうと、肩や腰を度々揉んでくれる。「神」である彼は子供を持つかが悩ましいので、無理に関係は進展させない。

「白夜、随分たったけど、いつ封印が解けるのかな……」

竜宮の封印、間に合うかな、とよく頭を悩ませている。封印はできても、何かが上手くいかない夢を視る、と彼を恨めしそうに見るのだ。

そう言えば、姉の件で察しておくべきだった。彼女は当初から魔王を嫌っていたが、いつか姉を奪われると知っていたかららしい。

「白夜が起きたら、絶対、`腐れ縁、のアッシュに何かしてくる」

彼女の独占欲は強い。それは遠く、知人レベルにおいてまでも。

今まで見ることのなかった未来の夢が、最近は彼女に押し寄せてくる。そう不安げに話すことが多くなった。

彼女曰く、これは彼女の知らない未来。自分が生きているのが想定外で、どこから溢れて、どこにつくかわからない流れが怖い、と、竜宮を少しずつ閉ざしながら俯いている。

彼女も彼も、方針は一致していた。なるべく人世に関わらずに、竜宮に引きこもること。

しかし神域である竜宮の気だけで生きられる彼とは違い、人間ほどの量はいらぬものの、妖狐の彼女は定期的に甘い物が要った。彼も煙草の葉はほしく、二人で茶っばや果物、小麦やサトウキビに乳牛と飼料を育てて暮らしていると、竜宮全域の制圧がつい後回しになった。

「ごめんね、アッシュ。あたし、助けてもらってばかりで、アナタに何もしてあげてない」

別に、と、すっかり自給自足生活に慣れた彼は、思えばこの頃が一番幸せだった。

何か他に、ほしいものは？　ときくと、彼女は飽きずに顔を赤らめ、彼のまっすぐな黒い目から顔をそらし、はにかむように口にしていた。

「……名前。アナタだけの、あたしの名前」

ぐ、と彼がつまる。以前からちよくちよく、彼女が望んでいた件を改めて言われた。
彼は何故か、気が進まないのだが、彼女曰く最初の愛称は姉のもので、魔竜の名はやはり好きではなく、彼からの特別な名前がほしいと言う。

彼としては、魔竜の紅い花が名付けとして勝てそうにないので、彼女の望み自体は可愛い逃げ回っていた。彼女は魔竜の名のアナグラムを通して名乗り、彼もあえて名を呼ぶ時はそれを使っていた。

それでも、まだ視ぬ運命が怖い、と何度も彼女が泣き出しそうに言う。だから彼は、そんな荒波が訪れないよう、祈りを込めて「^{なま}凧」という名前を贈った。

太古から水を穢して動きを止める、彼だけが解る名。彼女はとても嬉しそうに……そして、最早ごまかすことができないように、火の池に揺らめくさざなみを伝えた。
「ああ……やっぱり、あたしが、『凧』だったんだ……——」

その名を持つ紅い妖狐が、これから引き起こす様々な出来事。とっくに炎獄の支配者に目をつけられていた彼女は、いつか自身がその名を持って、火の池の天使となる未来を視ていた。

それは逃れることができず、彼女自身が選んだ末路。魔竜でも蒼い天使でもなく、さざなみの妖狐としての彼女の名前。

それでもずっと、認めたくなく、せめてさざなみを鎮める「凧」たれと望んだ哀しい賭けだった。

^{アッシュ カイ}彼が彼と感情を共有したように、炎獄の一員、さざなみの凧、と彼女もつながってしまった。いつかさざなみとなる自身を夢で視続け、彼女は既に「凧」になっていたと言える。

それでも二百年近くは、彼と幸せに竜宮で暮らした。その思い出で充分だと言うように、最後まで彼のことを愛おしそうに、青白い瞳は見つめ続けた。

「ねえ。^{さくら}咲香と^{とうか}桃花のために、玖堂さんの家に診療所を建ててほしいの」
「……は？」

竜宮と人間界では、時間の流れ方が違う。人間界での二十年は、竜宮では二百年に迫り、玖堂家の時間では彼がちょうど橘診療所の彼になる頃合いだった。

「神」にはならないから、と、「凧」は彼との子供を望んだ。彼の水を止める「力」が半減したものの、確かに「神」でないヒト、水気を操る業を継ぐ長女の咲香と、魔竜の逆鱗を継ぐ次女桃花が二人の間に生まれた。

それまで「凧」は、何も尻尾を出さなかった。娘二人が幸せになるために、姉夫婦とその子達のいる人間界での足がかりがある、と、彼に「橘診療所」の院長となることを望んだ。

「.....大好き、アッシュ」

「凧」がいつから、荒れ狂う運命のためだけに生きるさざなみとなったのかはわからない。彼に何の相談もなく、「凧」は長女を強力な悪魔に、次女を妖精に預けて童宮を閉ざした。

そして彼が、最も衝撃を受けた結末。死にゆく運命にある次女を救うためだと、彼女は自らの身体を魔竜の逆鱗の縁で次女の魂に明け渡した。彼女も次女も、そうした魔竜の巫女であるさだめだと言い、次女を守ろうとする飛竜の男の元へ「凧の身体」は去ってしまった。

娘に身体を譲った凧の魂はさざなみの天使となり、そのままずっと彼の元に在ったが、彼にはそれは、裏切りとしか思えなかった。彼の「力」が半減していなければ、飛竜の男を殺していただろうほど。

「.....ああ。俺も、あんたのこと、笑えないな」

彼だけの彼女になれ。かつて彼は、彼女にそう望んだはずだった。

娘達の当座の生活だけは何とか目途をつけると、彼はその後、凧の魂を玖堂家の闇の一部に閉じ込め、千年以上ぶりに自らを殺して、記憶の初期化を行っていた。

橘診療所の院長として、彼に重なる彼が存在するため、全てを忘れ切ることはいできない。それでも耐えることができなかった。彼以外の男のそばに、凧であった者が在る地獄の沙汰を。

彼と二人だけの世界。閉じ込められた黄泉を、凧はそう呼んでいることも知らずに。

終曲 -空-

人形の躯体で動けるようになった、蒼い天使に唐突な求婚をしてから。

橘カイがアッシュである世で、彼を院長にした嫁^凧が診療所の一部に幽閉されていること。それを彼は、ようやく思い知ることになった。

「……いや、それ。俺の記憶じゃないし、俺の罪でもないだろ」

「あははははは。すみませんねえ。うちの魔竜が、迷惑かけて」

彼が診療所^{からだ}で躰を整えてやった、不死の人間が笑っていた。

正確には自分で死んだ人間を縁あって乗っ取り、不死人として行動している黒ずくめの女だ。

「でも言った通りだったでしょ？ 天使のナーガたん、動揺したでしょ」

「いちいち何処でも、俺とあいつの縁を結ぶな。そもそもあいつ、普通に天使やってからもう二百年以上はたってるくせに、何で未だに反応が乙女なんだ」

彼の頭が激しく痛くなった。橘診療所は異世界も並行世界もつないでしまうパラレルワールドであり、そんな所にずっといる^{カイ}彼は、彼とは違う運命を辿った^{アッシュ}彼の記憶もこうして知ってしまう。

つながってしまっているので、アッシュの嫁である^凧が扉の一つの先にいる。彼が出会った蒼い天使と、同じ存在でも違う運命にある紅い妖狐が。

「妖狐の凧たんにも、会ってあげれば？」

「やめてくれ。俺でない俺がそうしかねないから、^{そそのか}唆さないでくれ」

本当にどうしようもないこととして、今の彼は、妖狐の凧と二百年は円満に暮らせた^{アッシュ}彼が羨ましかった。

その後待つのは地獄だろう。姉を盗られた、と嘆く凧に負けず劣らず、彼も独占欲の強さが過ぎる。幸せな時間が続いたからこそ、苦しみが大きくなるのはわかるが。

こちら側の蒼い天使が、墮天してでも海竜の人形を使おうとしているのは、姪である
今代の魔竜の代わりに悪魔の城を管理するためだ。天使の身では魔界に入れず、五代目
になる魔竜の巫女が担う悪魔には、悪魔としての彼のパートナーとなるさだめもある。

魔竜である姪には既に、飛竜の男な連れ合いがいる。凧の件で意趣返しをするなら彼
がその姪を娶ってしまうのも一つだが、この世界での飛竜の男には酷いとぼっちりだ。

ナーガという、かつての魔竜の姓を名乗る蒼い天使に、彼はやがて「ナギ」の名を贈
る。ナーガは人間界では竜王を表す言葉で、女の竜をナーギィという、と。
「.....この、物好き。あたしなんかの、どこがいいのよ？」

人形の顔をも真っ赤にしてまで、蒼い天使はその名前を受け取った。

応えることはやめておいた。彼女を「凧」にしないために。



紅い狐

著 pierrette**

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
